

西鶴『独吟一日千句』：追善十百韻の試み

中嶋， 隆

<https://doi.org/10.15017/4741981>

出版情報：雅俗．10， pp.34-46， 2002-01-30． 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



西鶴『独吟一日千句』

中 嶋 隆

——追善千百韻の試み——

一、「千句」か「千百韻」か

木村三四吾氏の紹介された西鶴『独吟一日千句』は、延宝三年四月三日に歿した二十五歳の妻を追善する点で、西鶴伝記研究に欠くことのできない資料である。^{注1}

また、寛文十三年六月刊『生玉万句』、同年（改元して延宝元年）九月刊『哥仙^{大坂}俳諧師』初撰本、十月刊同再撰本と、創業期の大坂出版メディアを積極的に利用した西鶴の一連の俳諧活動に占める本書の位置も小さくはない。

ちなみに、江本裕氏の研究調査によれば、本書末尾に付される追善発句の作者百五名のうち、『生玉万句』に

載る者三十六名（出句者^{注2}二〇四名）、『歌仙^{大坂}俳諧師』に入る者十五名であるから、追善にあたつて、新たに発句を寄せた俳諧師が多かったことがわかる。西鶴の俳壇における自らの影響力を強めようという意図も、かいま見えるのである。

一方、一日に千句独吟するという速吟傾向は、矢数俳諧に到る西鶴俳諧の特性を示す嚆矢となった。

千句 三日 四百韻つ、

習礼一日其日式百仕候

（俳諧之口伝^{注3}）

延宝五年四月、中村西国に授けた俳諧伝書で、西鶴自らが述べるように、たしかに「千句」は三日かけて興行す

るのが通例であった。「千句」様式を改変してしまった本書の「いわば破天荒ともいふべき試み」について、通説を整理された中野沙恵氏の指摘を要約し、簡条書きにする。^{注4}

(1) 普通三日かける「千句」興行を一日でやつてのけた。

(2) 四季にわたるべき「千句」の各百韻の発句がすべて「時鳥」^{はときと}即ち夏の季である。

(3) 「千句」の後に、すべてホトトギスを詠みこんだ百五人の発句を「追善発句」として添えている。

(4) 第一から第十までの各百韻の巻頭にすべて「追善俳諧」という語を掲げている。

以上のような「千句」様式の改変に、どの程度西鶴の独創を認めるべきか。

まず、(1)(2)の点である。独吟であることを除けば、「千句」興行を一日で行ない、各百韻の発句の季語を統一することには先蹤があった。最近、牛見正和氏が翻刻、紹介された寛文十三年八月刊『清水千句』^{注5}である。山口清勝主催の大坂清水寺奉納俳諧十百韻を収めたこの

「千句」は、『清水連歌』に倣い、各発句に「花」を詠み込み、その序に「奉納の十百韻は一日千句なりければ」とあるように、「延宝三(一六七五)年興行の西鶴の『独吟一日千句』に先行し、寛文十三年当時大坂俳壇において、既に速吟俳諧が催されていたことを伝える俳書」であった。

連歌では、「花千句」のような類題連歌の伝統があるが、俳諧にも、季吟・湖春・正立の三吟「花千句」等この様式が踏襲された。西鶴自身が、元禄二年筆『俳諧のならひ事』で「類題とて同じ物を十句揃て千句の発句いたす事ありたとへは／桜千句／紅葉千句／雪千句」と述べている。各百韻の発句の季語を統一した「千句」の例には、たとえば寛文五年刊『雪千句』がある。披見の東大総合図書館竹冷文庫蔵本は、大屋多詠子氏の解題を引用すると「雪を題とする作者知らずの発句十句を立句に卷かれた百韻十巻に、重頼・末得・玄札・一幽(宗因)・玖也・道寸・季吟・立圃・成安・空存の十人がそれぞれ点を加えた」^{注6}ものであり、実質的には、「十百韻」の点取りである。

したがって、『独吟一日千句』は、『清水千句』などの「花千句」や「雪千句」がそうであったように、「十百韻」を単に「千句」と称したにすぎないと考えれば、季題を四季にとる等独自の式目をもつ「千句」様式を改変しようという西鶴の意識は希薄であったと言わざるをえない。簡単に言えば、「追善十百韻」である「時鳥千句」を、西鶴は一日で独吟したのであった。

ただし、前引の西鶴筆『俳諧之口伝』には、『独吟一日千句』第三の発句・脇「ほと、きすか、かさとりのかたちはいかに／おんは仏法僧となくらん」を引用し、「らん留の脇百韻俳諧にはせぬ事に候 千句の時発句の仕立各別なるとまりなれはこのみてめつらしき脇の留仕申候 も留同前（傍点筆者）」と書かれている。千句の各百韻の発句は、西鶴が『俳諧のならひ事』「千句掟の事」で「興行思ひ立時十一人連衆を極めて其内の宗匠に題割をいたさせ（略）習礼の日限迄に思案する也」と述べるように、興行以前にすでに作られているものであった。西鶴も恐らく、各百韻の発句・脇・第三をあらかじめ句作した上で、独吟に臨んだものであろう。つまり

『独吟一日千句』の「発句の仕立各別なる」のは、十百韻が独吟されたゆえに、結果的に、複数の連衆を前提にした作法の定められた「千句」と同じ「発句の仕立」となったと考えるべきではないだろうか。『俳諧之口伝』の「千句の時」は、単に「百韻を十卷作る時」と同じ意味で用いられていると考える。

では、西鶴の独創はいかなる点に見出されるのか。まず第一に歌語として多様な用いられ方をしていたホトトギスを、「ほととぎすは冥土の鳥」（譬喩尽）という俗説によって、亡き妻追善を象徴する季題に変質させたことにある。そして、従来の類題千句に詠まれることのなかったホトトギスを、類題として採用したことにある。

千句（十百韻）を一日で詠むという速吟が『清水千句』で既に行われていたことは、前述のように、牛見正和氏が指摘する。西鶴は、速吟のアイデアを『清水千句』から得たのではないかと、思われるほど、牛見氏論文掲載の巻頭の写真で見るかぎり両書の版面はよく似ている。一つには、両書とも、各丁の句数が、懐紙の句数と対応する横本形式が採られているからであろう。この体裁の

俳書は必ずしも珍しくはないが、通常、懐紙の横三分の一の位置に書かれる「賦何籠俳諧」が内題「清水奉納千句」より幾分大きめに書かれている。同じように、「独吟一日千句」の「追善俳諧」は、横三分の一の位置に置かれ、内題「独吟一日千句」より大きく記されている。

『生玉万句』で俳書出版を始めたばかりの「大坂阿波座堀 板本安兵衛」が、京から刊行された『清水千句』の「賦物」の体裁を模倣した可能性もある。各百韻に「追善俳諧」と記されている(4)理由は、この辺にあるのではないだろうか。

中野沙恵氏の指摘する(3)については、どう考えるべきか。

本書には、通例見られないような不体裁が一箇所ある。「独吟一日千句 第十」の名残の裏八句が記されるのが「四十二」丁裏である。次丁の丁付けは「四十一上」、その表のほぼ中央に、版元「大坂阿波座堀／板本安兵衛」と二行に記され、その左に「追善発句」と彫られている。西山梅翁以下百五名の追善発句は「四十一上」丁の裏から始まり「四十六」丁裏で終わる。西鶴の独吟千句の終

わった丁の次丁から「追善発句」が始まり、版元名を記す奥付は、その後に附されるのが通常の体裁であろう。

結論のみ述べるならば、「独吟一日千句」は当初は西鶴の独吟だけを刊行する予定だったが、版元名を彫った最終丁の版木に手を加えて、「追善発句」が追加されたと推測されるのであって、西鶴が「千句」様式を変えるために、追善発句をあえて末尾に置いたと考える必要はない。

俳諧追善集は、言うまでもなく、父母・師友を追慕することはあっても、妻が追善の対象となることはない。その目新しさと、すべてホトトギスを詠み込んだ追善発句を集め、追加した点などは、西鶴の独創の第二と見なすべきかと思う。

二、「軽口・大笑ひ」の付合

周知のことだが、大谷篤蔵氏は『独吟一日千句』の「第一・第二・第三の各巻の発句から第三までの付合、それぞれに臨終から葬送、茶毘、骨上げ、初七日までの一連の葬送儀礼、追善仏事の順序を追っている」とされ

た。また前田亜弥氏は、「第一の巻から第五の巻までを妻の臨終から葬送、冥土への旅立ち、妻の行き着く冥土の景までの流れという一連の構想の下に用意された」と、西鶴の構成意識をより強く読み取られている。前田氏の指摘するように、追善集によく見られる発句・挙句に哀惜の念を吐露するようなレベルを超えた西鶴の構成意識が『独吟一日千句』に見られることは、たしかに特徴的であり、独創の第三とすべきであろう。

『独吟一日千句』にかぎらず西鶴の俳諧について考察するには、その俳壇・俳諧史上の位置や西鶴の独創性を確認すると同時に、西鶴の三十代の俳諧活動が、四十代になって始まる浮世草子執筆にどのように影響したのかという観点も必要となる。後者の点から見ると、『独吟一日千句』の前述の構成意識は、そのまま浮世草子の構成意識につながっていくものではない。たしかに、発句・脇・第三を一連の構想のもとで創作することは、千句（十百韻）という様式のなかでは斬新なアイデアではあったが、あくまで俳諧撰集の一趣向にすぎない。小説の構想とは質的に異なるものなのである。

西鶴の俳諧から浮世草子への転化を考えるのには、双方の素材の類似や、連句に間々みられる物語的付合を指摘するだけでは十分ではない。両者の構造にまで掘り下げた考察が必要となろう。その意味で重要な視点を、大谷篤藏氏は前記論考で提起しているように思う。引用が長くなるが、その箇所を挙げたい。

引導や廿五を夢まぼろ子規

尻かしらからかくる螢火

の付句の「螢火」は、一句の中では句頭の「尻」の縁語で、一句の意味としては、螢火を茶毘だびの火の「見立て」として、「尻かしらからかくる茶毘の火は螢火のようだ」とする。かくして「引導」と「火葬」、「子規」と「螢火」と、四つ手付のように解して、次々と快適な速度で付けて行く（略）しかし、私はそうは思わない。「螢火」を見立てとはとらないで、まともに螢火そのもので火葬する、と解する。もとより熱を伴わない螢火で火葬するなんて現実にはあり得ようはずがない。ナンセンスであり、非現実である。けれども、「引導や廿五を夢まぼろ子規」と

郭公が葬列の先導をするなら、螢火で火葬するとい
うのが、前句からの当然の帰結である。

大谷氏の重視する「前後句の意味の連繋」を付筋にし
た解釈、今で言うならさしづめベタ付け解釈だが、実は
このような付合が「軽口・大笑ひ」の俳諧の内実ではな
かったか。

私が大谷氏の指摘に注目するのは、「見立て・あしら
い・付物・取成し」等の付合技巧が、「意味の連繋」を
軸に、コンテキストの複綜に転化しているからだ。つま
り、「引導——茶毘」という現実の葬礼を写すコンテク
ストに「郭公——螢火」という自然の景物をあらわすコ
ンテキストがかぶさることによって、「郭公が葬列の先
導をするなら、螢火で火葬する」という、「無心所着」
の非現実的コンテキストが成立する。

このようなコンテキストの重層・複綜は、西鶴の浮世
草子の根本的方法とは言えないか。たとえば、『西鶴諸
国はなし』巻四「忍び扇の長哥」は、大名の姪と年季奉
公の中間侍との駆け落ちを描いた周知の短編である。西
鶴は、この話を、身分違いの恋物語によくある美男美女

の恋愛ではなく、姫を婚期の逸した「甘あまり」の美女、
侍を「やうくうつくしやう中小姓こしょうぐらいの風俗ふうぞく、女のすかぬ男」と
設定することによって、「結婚しない女の逃亡」とでも
言うべきコンテキストを、「身分違いの恋」という物語
的コンテキストに重層させている。西鶴小説の方法につ
いては、拙稿「西鶴・読者・想像力——コンテキストの
複綜をめぐって——」を参照注16されたいが、ベクトルのはっ
きりした単一のコンテキストによって短編が構成されな
い点にこそ、西鶴が時代を超えて様々に読み継がれた原
因がある。

さて、大谷篤藏氏の驥尾に付し、『独吟一日千句』の
「第二」百韻から同様な例をいくつか挙げる。

影うすき頭巾の山に晨明ありあけの（初表7）

枯野の尾花ちりめんのきれ（初表8）

前句は、西鶴が中村西国に授けた「俳諧之口伝」に、
この句を引いて「有明の月の都とつゝきたる詞をのこし
申候ふん也」と自ら記しているので、「月の都」を抜い
た句形であることは明らかである。季は「晨明」で秋
（「山之井」）、月の定座。打越「時雨そめくる茶挽人形」

の「時雨」に「月」(『類船集』)を付け、「茶挽人形」に「頭巾」をあしらう。一句の意味は、頭巾のような山の頂に、ほのかに有明の月が輝いているという意であろう。

付句の季は秋(尾花)。山・月に「枯野の尾花」、「頭巾」に「ちりめんのきれ」をそれぞれあしらい、枯野に群生する尾花をちりめんに見立てる。枯野の尾花が有明の月に照らされて、ちりめんのように白々と見える意、と解すれば恐らく事足りるのかもしれない。しかし、私は、この句の面白さは、「山・枯野の尾花」という景物が、「頭巾・ちりめんのきれ」に見立てられたことにあるのではなく、「頭巾・ちりめんのきれ」というコンテクスト(付筋)に、自然の景物をまぎれ込ませた点にこそあると思う。

前句は、有明の月に照らされた頭巾の影が、ほのかに見えたの意で、この頭巾が山ならば、ちりめんのきれは、さしづめ枯野の尾花であろうかと言うのが付句の意ではないか。もちろん前述の解釈にも見立ての面白さがあるが、混在する景物・人事の両様のコンテクストの一方の付筋から見た他方の意外性という点では、後者の解釈の

方が、より「大笑い」に収斂しよう。

吹ちつてゆく和田の笠松 (二裏4)

鳥おとし今朝は雲にや埋むらん (二裏5)

前句の「和田の笠松」は、西鶴『大矢数』第十七「是から木遣りで和田の笠松」、第二十六「成ほどふるひ和田の笠松」、また『懷硯』卷二の三「和田の笠松もむら雨の跡おもはれて」など、他の西鶴作品にも登場する摂津の名所である。前田金五郎氏『西鶴大矢数注釈』には『福原鬘鏡』の記事を引く。屋上屋を架するが、『国花万葉記』を引用しておく。「兵庫町はつれより二丁程南にあり。古松は枯て今は後植の木也。枝末迄かくれる蔦の紅葉して錦をはるやわたの笠松」。『和漢三才図絵』にも、ほぼ同じ内容が記載される。打越は「恋風の福原の京わけもなし」。その福原から和田を出したのだから、「恋風の福(吹)」と「吹ちつてゆく」とでは差合気味ではある。福原の京から吹いた恋風が、和田の笠松を吹き散らしてしまったといった句意であろう。

付句の季は秋(鳥おとし)。前句の笠に鳥おとし、すなわち「かゞし」(『類船集』)が付く。一句の意は、笠

をかぶった鳥おどし（案山子^{かかし}）が田に立っているが、今朝は雀は雲間に隠れているのだろうか、と解釈すればよいのかもしれない。が、これでは面白くない。笠松を鳥おどしに見立て、風に吹き飛ばされた案山子は、今朝は雲間に埋もれていることだろうというのが付句の意である。あるいは前句の「笠松」を文字どおり笠をかぶった松とり、その笠をかぶった案山子が雲間に埋もれているとも解される。いずれにしろ、笠松が風に吹き散っていくという景物を、案山子が雲間を飛んでいくといった非現実的コンテキストに転換したことが、この付合の面白さである。

木々の枝いろはにほへと書つ、け（名残表11）

露もしくれも古手商ひ（名残表12）

前句の季は「いろは（色葉）」で秋。「木々の枝色葉」と「いろはにほへと」を言い懸け、「木々の枝」を「いろはにほへと書つ、け」の序詞のように用いている。打越は「名所の口に見えわたる^{かり}廬」。打越の「名所（記）の口」と「雁（字）」に「いろはにほへと」をあしらう。打越の「雁」を名所記の料紙に描かれた絵柄ととり、

「木々の枝」はその文字を見立てたとも解釈できるが、そうではなく、雁字のごとく、名所記のなかを本当に雁が飛んでいるのなら、「いろはにほへと」と綴られた文字のように、その名所には、色づいた木々がさぞ連なっていることだろう、というような句意ではないか。この付合の眼目は、「雁・木々の枝」という景物と「名所・いろはにほへと」という名所記の付筋とを取り合わせ、名所記のなかに実際に景物が存在するかどうかのような句作りをした点にある。

付句の季は秋（露・しくれ）。前句の「いろは（色葉）」に「しくれ（時雨）」（『類船集』）がつく。前句の「いろはにほへと」を商品につけられた符帳に取り成し、「古手商ひ」をあしらう。色づいた木々に符帳をつけて、露も時雨も古着の商売をしているというのであろう。露や時雨が、錦ならぬ色葉を商うという現実にはありえない言葉遊びだが、「露・時雨」という歌語を「古手商ひ」という人倫に結びつけたところに「大笑い」がある。

露もしくれも古手商ひ（名残表12）

守山の月も西へやたふれ者（名残表13）

付句の「守山」は、琵琶湖東岸の中山道の宿駅。「国

花万葉記」は、「山にはあらず里の名也。みの路へ行宿也。京より七里也」と記し、「古今 白露も時雨もいたく守る山は下葉残らず紅葉しにけり 貫之」「続古 此頃は月社（こも）いたく守る山の下葉残らぬ木枯の風 雅経」の二首を載せる。季は秋（月）で、月の定座。貫之の歌から、前句の「露・しくれ」に「守山」をつけ、「古手商ひ」に倒産者の意の「たふれ者」をあしらっている。句意は、露と時雨が古着商いをしているのなら、西へ傾く守山の月はきつと分散した商人にちがいない、ということだろう。西へ傾く月を「西へやたふれ者」と表現したところが俳諧だが、見立てを越えたナンセンスな句作りである。この場合も、打越・前句と同様、「露・時雨・月」と「古手商ひ・たふれ者」という異質なコンテクストとを重ね、非現実的句意を生じさせたところに、句作りの妙味がある。

守山の月も西へやたふれ者（名残表13）

椀箱すり鉢水壺水海（名残表14）

前句の「守山」に「水海（琵琶湖）」、「たふれ者」に

その家財道具である「椀箱・すり鉢・水壺」をあしらっただけだが、恐らく「守山の月」が破産したなら、その分散諸道具のなかには琵琶湖も含まれていることだろうという句意にするために、「水海」を投げ込んだのだろう。

三、「とぶ」俳諧

以上の付合の特徴を図式的に述べるならば、A・B二つの異質なコンテクスト（付筋）が取り合わされることによって、Cという荒唐無稽で非現実的な意味が生ずる。そのA・BとCとの拡張が、「大笑い」に収斂するという構図が見られる。無論、このような付合が、百韻全般に貫かれているわけではない。貞門以来の「俳・あしらい・つけ物・取成し」などの付合技巧を駆使した「心付け」が百韻の多くを占める主要な付合である。枚挙にいとまないが、そのような例をあげる。

高いひき心のまゝに波まくら（三折表3）

鷹の羽かせに横手うたる、（三折表4）

打越は「浦のおとこの灸かいたむか」「浦のおとこ」

を船頭ととり、船上で、船頭は灸をすえ、客は高軒をかいていっているという意。付句は、高軒の男を舞曲の「百合若大臣」に見かえて、その愛鷹「緑丸」から「鷹の羽かせ」を付ける。^{注12}すなわち、蒙古征伐の帰途、百合若大臣は玄海が島で「寝入て左右なく起きさせ給はず、夜日三日ぞまどろみ給ふ」うちに、別府兄弟に置き去りにされる。その存命を御台所に伝えたのが「君の秘蔵の緑丸」であった。句意は、寝入っていた百合若大臣は、緑丸の羽風に目を覚まし、横手を打って喜んだということで、典型的な俳付けである。

鷹の羽かせに横手うたる、（三折表4）

ひつしりと乙矢はねかふ所にて（三折表5）

前句の「鷹の羽」を矢羽に取り成し、二の矢の意の「乙矢」をあしらう。鷹の矢羽をつけた二の矢が、もの見事に、ねらった的に命中したとの意。

ひつしりと乙矢はねかふ所にて（三折表5）

御前と申ことに若年（三折表6）

付句は、前句の場をつけただけの遣句で、まだ年若い射手が、殿の御前で思いのままに的を射たという意であ

る。

このような付合と、前述した名残の表十一句目から折端までの付合とを比較すれば、その差は明白であろう。

乾裕幸氏が考察された四つ手付け風な「あしらひ」、すなわち「あしらわれた詞が句中の他の詞と論理的ないし観念的に矛盾することによって、その矛盾の原因を前句に探らせ、アツと了解点に達せしめる仕組みに知的なおかしみを喚起させる手法」が談林的「あしらひ」なら、西鶴の試みた「軽口・大笑ひ」の付合は、大谷篤藏氏の強調されたごとく、前句・付句の意味の連係を重視する点が特徴的だったのではないか。このような付け方は、付句に付心とは無縁な言葉があしらわれたために起こる「正体無し」の句作りを拒む一種のバランス感覚につながっている。たとえば、前述の「木々の枝いろはにほへと書つゝけ」という句などは、一句の意味のきわめてとりづらい句である。が、前句「名所の口に見えわたる鷹」とあわせ詠むことによって、一句の意が氷解する。付筋における荒唐無稽な発想の、現実からの飛躍が極端であればあるほど、前句・付句の意味の連係が、付合に不可

欠な状件となつたのではないか。

著名な言ではあるが、『独吟百韻自註絵巻』で、西鶴は「難波の梅翁先師、当流の一体、たとへば富士のけぶりを茶釜に仕掛、湖を手だらひに見立、目の覚めたる作意を俳道とせられし」と述べる。「作意」の奇抜さは貞門俳諧とは異なる「とぶ」俳諧^{注6}を醸成した。たとえば、鹿島明神の要石^{かなめいし}が大雨に降られて沖の石となる（今度鹿嶋に大雨かふる／かなめ石沖の石とや成ぬらん）、笠をかぶつた案山子が風に飛ばされ雲間に漂う（吹ちつてゆく和田の笠松／鳥おとし今朝は雲にや埋むらん）といった奇抜さが「とぶ」俳諧の真骨頂であろう。

繰り返すが、私は、このような付合が、単に言葉の「あしらひ」だけで可能になつたとは思わない。西鶴の想像力を喚起し、同時に放埒な連想を抑制する契機となつたのは、「前後句の意味の連繫」すなわち「心付け」へのこだわりではなかったか。

四、俳諧から浮世草子へ

乾裕幸氏は、「心行」を西鶴独特の方法とされた。^{注16}「俳

諧当流といへるは、中古のごとく言葉をかざらず、心行の付かたを本として、三句目のはなれを第一に吟味をいたせし」と西鶴自ら述べる『独吟百韻自註絵巻』には、この用語が多出する。上野洋三氏が「前句の単語から連想される別の単語を軸にして考えるのではなく、前句の意味を全体に眺めて、そこから小説の一場面を發展させるように進める付け方」と「心行」を説明された^{注17}ごとく、ほとんどの用例が、前句と付け句とが構成する意味世界（場面）の謂である。

『独吟一日千句』にみられた「とぶ」付合は影をひそめるものの「心付け」にこだわる西鶴の方法は、『独吟百韻自註絵巻』の晩年にいたつても踏襲されているのだ。コンテキストの複綜が、俳諧と浮世草子に共通すると先に述べたが、西鶴の想像力は前句から喚起される一場面にまず集中し、そこから言葉をつむぎだす句作りが始まる。あたかも絵画における習作デッサンのように、小説の場面に転化しうるような無数のコンテキストがイメージされた点に、西鶴の俳諧の特徴があった。

もちろん、だからといって西鶴の俳諧活動が即浮世草

子の執筆に結びつくわけではない。西鶴の資質、その想像力が、言葉より意味、部分より全体を志向し、他の俳諧師より散文的であつたとするのでは、あまりにも、ありきたりの結論であろうか。『独吟一日千句』は、その意味で、小説における処女作のごとく、俳諧師西鶴の小説への可能性を示唆していたのだ。

注

- 1 木村三四吾氏「西鶴^{俳諧}独吟一日千句」(『國語國文』昭23・6)。なお、同氏による翻刻が「ビブリア」一輯(昭24・1)、影印は、『^{天理}圖書館善本叢書・談林俳諧集』(野間光辰氏解説)に載る。
- 2 江本裕氏「西鶴——哥仙^{大坂}俳諧師から大坂歳旦まで——」(『大妻国文』16 昭60・3)
- 3 「俳諧之口伝」「俳諧のならひ事」の引用は、『定本西鶴全集』12(中央公論社 昭45)
- 4 中野沙恵氏「俳諧独吟一日千句——亡妻への挽歌——」(『国文学解釈と鑑賞』平5・8)
- 5 牛見正和氏「新収俳書『清水千句』——解題と翻刻——」(『ビブリア』117 平14・5)。「清水千句」の出現により、『生玉万句』の開催が二月二十五日であつたこと、『生玉万句』序に「世人阿蘭陀流なとさみしてかの万句の数にもそのかれぬ」とある「かの万句」が『清水万句』であることが確定した。
- 6 田中隆裕氏は、「花千句」の例として、「宝徳千句」「初瀬千句」「表佐千句」「池田千句」「月村斎千句」「大原野千句」をあげる。(『新出の宗伊・宗祇出座の千句について』俳文学会口頭発表、平14・10)
- 7 東京大学附属図書館編『江戸期の俳書展——展示資料目録——』(平14・6)
- 8 大谷篤蔵氏「無常鳥——俳諧師西鶴」(『芭蕉連句私解』角川書店 平6)
- 9 前田亜弥氏「井原西鶴『独吟一日千句』試論」(『れぎおん』23・24・25、平10・10、平11・1、平11・4)
- 10 中嶋隆「西鶴・読者・想像力——コンテクストの複線をめぐって——」(『江古田文学——特集井原西

鶴」51 平14・11)

11 前田金五郎氏『西鶴大矢数注釈』第二巻(勉誠社

昭62)

12 『定本西鶴全集』10(中央公論社 昭29) 頭注に

指摘される。

13 引用は、寛永整版本を底本にした『新日本古典文

学大系59・舞の本』(岩波書店 平6)

14 乾裕幸氏『「あしらひ」考』(『初期俳諧の展開』

桜楓社 昭57)

15 「飛舩」「とぶ」俳諧については、次の論考を参照

した。

今栄蔵氏『「飛舩」考』(『初期俳諧から芭蕉時代へ』

笠間書院 平14)

加藤定彦氏「談林俳諧における『とぶ』の意味」

(『俳諧の近世史』若草書房 平10)

乾裕幸氏「西鶴の正風意識」(『俳諧師西鶴』前田書

店 昭54)

16 乾裕幸氏「西鶴の方法——《心行》について」

(『俳諧師西鶴』前田書店 昭54)

17 『俳文学大辞典』(角川書店 平7)「心行」の項

〔付記〕

本稿は、野間光辰・大谷篤蔵・浜田啓介諸先生らの主催されていた西鶴研究会輪講に参加した一九八五年当時の私のメモと、学習院大学大学院、一九九九年年度演習に基づいたものである。『独吟一日千句』の注解については別稿を用意している。